

1 なぜ未成年者がたばこを吸ってはいけないのか？

未成年者の喫煙防止に取り組むに当たっては、まず、この問いに対する答えを明確に理解しておく必要がある。

多くの子どもたちは、興味本位で喫煙を開始して、容易にニコチン依存症に陥っている。これは、正しい喫煙問題の知識が、子どもたちに理解されていないことが一因と考えられる。その結果、自分自身のみならず、周囲にも知らず知らずのうちに健康障害を引き起こしている。一度ニコチン依存症に陥ると、離脱（禁煙）は非常に困難となる。

従って、未成年期から喫煙問題の正しい知識を教え、将来、健康障害という残念な結果を引き起こすことのないよう適切な指導を行う必要がある。

○未成年で喫煙を始めると、将来に健康問題が発生する危険性が高くなる。

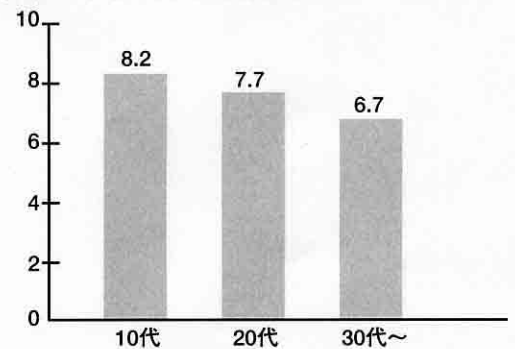
未成年者は成長期であるため、喫煙による影響が強くとともに、生涯の総喫煙量が多くなるため、将来たばこ関連疾患（肺がんをはじめとする各種がん、心筋梗塞、脳卒中、気管支炎、胃潰瘍、歯周病等）にかかる危険性が高くなる。特に、肺がんでは、20歳未満で喫煙を開始した男性が肺がんにかかる危険性は、20歳以降で喫煙を開始した者と比べて約2倍であるという報告（Hegmannら1993年）もある。

○喫煙を始める時期が早いほど、容易にニコチン依存に陥り、かつニコチン依存が強くなる。

成人の常習喫煙者の約半数は、未成年期からの常習喫煙者である。また、残りの大半も20代で常習喫煙者になっている。若年者の喫煙経験は容易に常習喫煙になりやすく、かつ、禁煙しにくくなることがわかっている。（旧厚生省「平成10年度喫煙と健康問題に関する実態調査」）

■年代によるニコチン依存度

（旧厚生省「平成10年度喫煙と健康問題に関する実態調査」）

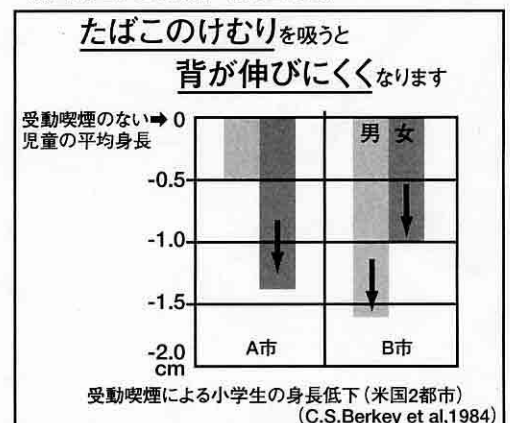


○若年期の喫煙がシンナー、アルコール、覚醒剤、麻薬依存のきっかけになることが多い。

薬物乱用者の多くは常習喫煙者である事が多く、喫煙によるニコチン依存症が、その他の薬物依存症のきっかけになりやすいことがわかっている（和田清ら1994年他）。

■受動喫煙が小児に及ぼす害

（静岡県立子ども病院 加治正行氏）



○若年期の常習喫煙者は、妊娠時にも禁煙できず、早産、低体重児の原因になっている。

若年喫煙者は育児期にも喫煙を続けており、早産、発育障害、乳幼児突然死症候群、中耳炎、知能問題など子どもに深刻な受動喫煙被害を及ぼしている。

○未成年者の喫煙は法律でも禁止されている。

明治33（1900）年に未成年者喫煙禁止法が施行され、20歳未満の喫煙禁止がうたわれた。更に、平成12（2000）年の一部改正により、未成年者への販売禁止が強化された。